『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』第四十八号　抜刷（二〇二二年二月）

【論文】

海老名・龍峰寺千手観音菩薩立像について

神野祐太

図１　千手観音菩薩立像　全体正面　海老名・龍峰寺

図３　同　全体右側面

図２　千手観音菩薩立像　全体左側面　海老名・龍峰寺

図４　千手観音菩薩立像　全体背面　海老名・龍峰寺

図５　千手観音菩薩立像　顔正面　海老名・龍峰寺

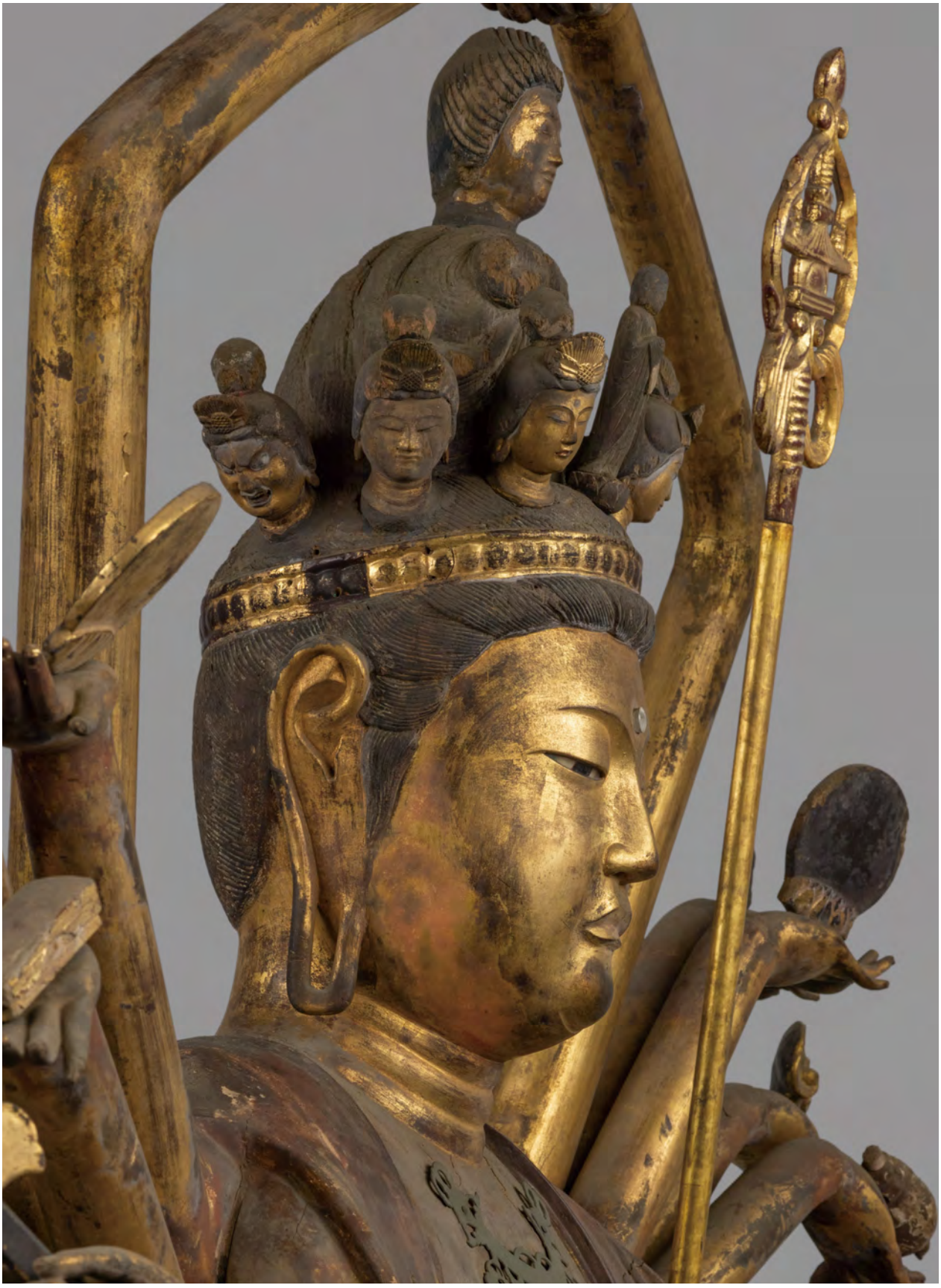

図６　千手観音菩薩立像　顔右側面　海老名・龍峰寺

図８　同　背面

図７　神奈川県水堂観音堂国宝修理図解　正面　個人蔵

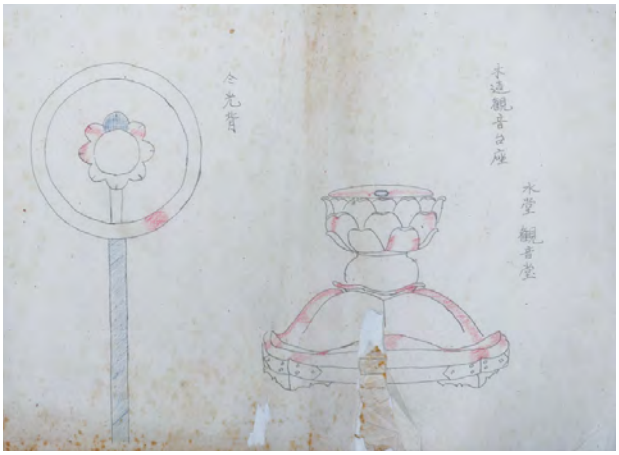

図10　同　台座と光背

図９　同　脇手の持物

【論文】

海老名・龍峰寺千手観音菩薩立像について

神野祐太

【キーワード】
清水寺信仰　代用檀像　一木造り　相模国分寺
相模国分尼寺（湧河寺・漢河寺）

【要旨】
本稿は、海老名・龍峰寺に伝わる千手観音菩薩立像の基礎データを提示し、伝来や製作年代について私見を述べる。本像は、大正十四年（一九二五）に古社寺保存法下で国宝に指定され、文化財保護法下で重要文化財に指定された神奈川県域でも比較的知られた仏像である。令和二年（二〇二〇）に特別展「相模川流域のみほとけ」に出品するにあたり、詳しく調査をする機会を得ることができた。製作年代について従来は古像を模刻した鎌倉時代の仏像と考えられることが多いが、作風や構造の検討から奈良時代末から平安時代初頭に造られた可能性について言及する。

はじめに

神奈川県海老名市国分北の龍峰寺には千手観音菩薩立像が伝来し、現在、同寺観音堂後方の文化財収蔵庫に安置される。付近には相模国分寺跡や相模国分尼寺跡があることから、それらとの関係が指摘される仏像である。大正十四年（一九二五）には古社寺保存法下で国宝に指定され、戦後文化財保護法が施行されてからは重要文化財に指定される。そのため比較的知られた仏像ではあるが、秘仏として年二回の御開帳で公開されるほかは、寺外で公開されたことはほとんどない。平成二十年（二〇〇八）の特別展「西国三十三所―観音霊場の祈りと美―」（会場：奈良国立博物館）[1]、令和二年（二〇二〇）の特別展「相模川流域のみほとけ」（会場：神奈川県立歴史博物館）[2]の二回が知られるくらいである。筆者は、後者の特別展の担当者として事前調査等で本像について子細に観察する機会を得た。本像を取り上げた解説は数多くあるものの、まとまった専論は見当たらない。そこで、今回得られた基礎データを提示し、これまでの見解を再検討したうえで、本像について私見を述べ改めて日本彫刻史上に位置づけてみたい。特に本像の製作年代は、鎌倉時代とされることが多いが、鎌倉時代の仏像にはあまりみられない構造や奈良時代や平安時代の様式を伴うことがつとに指摘されており、奈良時代後期から平安時代初頭に造られた可能性についても言及したい。

一　像の基礎データ

まず、龍峰寺千手観音菩薩立像（図1～6）の基礎データを提示する。像高（地付―頂上仏面）は一七四・六cm（五尺七寸六分）、髪際高は一五七・二cm（五尺一寸六分）となり、髪際で五尺を測る等身像である。[3]

形状についてやや詳しく述べる。髻は髪束三束を左右にあらわし、下元結紐は髪束一条とし、上部正面には左右に小さい髪束をあらわす。地髪は正面で左右に振り分け、髪束をあらわす。頭髪は毛筋彫りとする。後頭部の正中に線を刻み、くぼみをもうける。天冠台は紐、連珠（大粒）、紐とする。正面に化仏をあらわす。頭上面を十面（三面亡失）あらわす。配置方法は三段とし下から八面・一面・一面とする。頂上仏面は一面。波状髪、白毫相、顎の括り、耳垂部不貫。慈悲面は四面（内一面は後補）。髻。下元結紐紐一条、地髪部に毛筋はあらわさない。天冠を付ける。白毫相（一面）。三道相。耳垂部不貫。顎の括り。瞋怒面は一面。単髻。天冠。白毫なし。眉根を寄せ、瞋目とする。上歯で下唇を噛む。顎の括りなし。三道相。白牙上出面は一面。口を開け上歯を見せ、二歯は上出する。舌をあらわす。それ以外は瞋怒面に準じる。本面は白毫相をあらわし、耳垂部環状。顎の括りをあらわす。三道相。上半身に天衣・条帛、下半身に裙（折り返し付）を着ける。天衣は、背面で一度たるみをあらわし、両肩を覆い体側に垂れる。条帛は左肩に懸かり、右脇腹を通って再び左肩に懸かり、一度たるみをあらわし一枚目の裏から表に通し、裏をみせる。もう一方の端は現状ではわからない。裙は、正面で右前に打ち合わせる。手は全四十二手ある。真手（第一手）は両手を屈臂し胸前で合掌する。第二手は両手を屈臂し腹前で右手を上にして禅定印を結び仏鉢をのせる。左一列目は日輪、栄螺、髑髏（柄付）、戟（屈臂して第一・三・四指を捻じる）、羽板状（榜排か）、水瓶。二列目は頭上で掌を上にして右手と組み化仏をのせる、転宝輪、雲、釧、蓮華柄付、弓、五指を伸ばす（施無畏印）。三列目は、宮殿、宝珠、未敷蓮華柄付、払子、水瓶、羂索。右一列目は、月輪、経箧、斧、錫杖（屈臂して第一・三・四指を捻じる）、蒲桃、数珠。二列目は左二列目第一手と同じ、三鈷杵、卍字、経巻、鈎、蓮華柄付、矢。三列目は鏡、独鈷杵、未敷蓮華柄付、斧、剣、五鈷鈴となる。第一・二、左右二列第一手を除く脇手は腕釧を付ける。両足をやや開いて直立する。

品質構造と保存状態については、実査の際に作成した調査ノートと昭和二年（一九二七）に美術院（現、公益財団法人美術院国宝修理所）が本像を修理した際に作成した『神奈川県水堂観世音国宝修繕竣功報告書』[4]及び『神奈川県水堂観音堂国宝修理図解』（図7～10）を参考に記述する。

一木造りの像で、頭体幹部はカヤとみられる針葉樹材の一材製である。木芯の有無は不明。内刳りを施さない。耳前で面部を割り離し玉眼を嵌入するようにみられる。脇手はヒノキ材とみられる。左右第一・二手は肩・肘・手首でそれぞれ矧ぐ。その他の脇手は、左右に前後三材を矧ぎ、前から六手、七手、六手をそれぞれ矧ぐ。各手は概ね手首を矧ぐ。左右の二列目第一手は、肩、肘、手首で矧ぐ。左右の一列目第四手は前膊、手首で矧ぐ。頭上面七面と化仏は別材。両足先を矧ぐ。表面は、布貼りのうえ錆漆をかけ、体幹部・天冠台は漆箔。地髪は青色とする。瞳部は黒色で、赤色で縁取りし、目尻と目頭に青色を施す。

本像は複数回修理がおこなわれているとみられる。昭和二年の美術院の新補箇所は、白毫（水晶製）、脇手の指先、左手一列第三手の髑髏、第四手の戟の柄、二列第三手の雲、三列第六手の羂索、右手一列第四手の錫杖右半分と柄、二列第四手の経巻、三列第一手の鏡、光背頭光の上部と柄、以上である。それ以前の修理の後補として、頭上面、脇手全て、天衣遊離部、表面の布貼り、彩色、金箔、玉眼、胸飾り（金属製）、光背（頭光、高一九九・五㎝、木製・漆箔）と台座（蓮華座、高七二・五㎝、木製・漆箔）がある。

本像は脇手の一組を頭上で組みその上に化仏を置く特徴的な形から、

京都清水寺の本尊千手観音菩薩像の姿を写したいわゆる清水寺式千手観音像と称することができる。東国に伝わる清水寺式千手観音像には、九世紀とみられる静岡・鉄舟寺（久能寺伝来）像、十二世紀の岩手・中尊寺讃衡蔵像が知られる。中尊寺像は現状では脇手は後補のものに変更されているものの、当初から清水寺式であった可能性が指摘される。[5] 平安時代後期には東国でも清水式千手観音像が造られていたことがうかがえるが、本像がいつからこの姿になったのかはわからない。

二　伝来について

本像の伝来について述べる。本像は元々龍峰寺に安置されていたのではなく、同寺末寺の清水寺に伝来した。龍峰寺は、滅宗宗興（一三一〇～八二）の寓居を寺院とし、臨済宗建長寺の末寺であった。一方の清水寺は、もと禅寺ではなかったが、文和年中（一三五二～一三五六）に滅宗宗興が禅宗寺院清水寺として再興した。南北朝時代に再興された清水寺はもともと低地にあったが、元禄二年（一六八九）に現在の高台に移動し、本像も清水寺水堂の本尊として祀られたという（以上、『新編相模国風土記稿』清水寺条）。清水寺は近世まで龍峰寺の末寺であったが、明治初年に廃寺となったため龍峰寺の境外仏堂となり、昭和初年に同寺が現在地に移転したことで、寺号を龍峰寺に統一し清水寺水堂は観音堂と呼称されるようになる。

次に本像に関わる縁起類は、現在三点が知られている。一点目の正保三年（一六四五）奥書の『相州相模高倉之郡興徳山清水寺本尊千手観世音縁起写』[6] は、漢字かな交じりの和文で記されることから和文縁起とも呼ばれ、現在知られる史料の中では最も成立年代が古い。筆者については不明である。原本は現在失われているが『相模国分寺志』[7] に引用されることから内容を知ることができる。二点目の元禄三年（一六九〇）奥書、碩寿撰『相模高座郡国分荘興徳山清水禅寺観世音菩薩縁起』[8] は全文漢文であることから漢文縁起と通称される。撰述した碩寿は龍峰寺の住持である。漢文縁起も和文縁起と同様に現在原本は知られず『相模国分寺志』所引のものを参照するしかない。三点目は、天保十二年（一八四一）成立の地誌『新編相模国風土記稿』に引用される『縁起略』[9] である。前述の二点と内容が異なることから別系統の縁起とみられるが、筆者や成立年代については不明である。また、龍峰寺十八世松堂がまとめた『瑞雲山龍峰禅師寺什物』（龍峰寺蔵）[10] の清水寺条にも触れるところがある。

諸本に記される本像の作者・製作年代・原所在をまとめると左のようになる。

史料	作者	製作年代	原所在
和文縁起	不明	大同二年（八〇七）頃	京都清水寺
漢文縁起	延鎮？	延暦庚辰（八〇〇）以降	京都清水寺？
縁起略	延鎮	延暦十九年（八〇〇）？	不明
什物	延鎮	宝亀九年（七七八）	京都清水寺一木同作

細部の違いはあるものの、奈良時代末から平安時代初頭に僧延鎮が関わり、京都清水寺に安置されたことや同寺本尊の余材で造ったことが記される。これらは京都清水寺の縁起類に仮託しているとみられ事実とは認められない。ただ、江戸時代に奈良時代や平安時代の仏像と認識されていたことは一考の余地がある。

これらの縁起類には千手観音像造像のあと、約三百年間の記述はなく、鎌倉時代初頭の像の発見に話が飛ぶ。和文縁起には、源頼朝と義経が平家を滅ぼし、父義朝の菩提を弔うために観音像を安置する七堂伽藍を建

立し、阿閦・宝生・阿弥陀・釈迦の各如来像を造像したという。漢文縁起には、国分の江に光り輝く函があり、その函には延喜の銘が刻まれており、中に千手観音像が納められていた。その後頼朝は堂宇を建立し、四仏を追加で造像したという。『縁起略』では、文治二年（一一八六）秋、相模川の下流に光る巨函があり、老翁が言うには延鎮が彫刻した千手観音像といい、果たしてその中から千手観音像を発見した。翌年、源頼朝が命じて仮堂を造りそこに安置した。文永中に堂舎が完成し、四方の教主（四仏）を造像したとする。三つの縁起ともに、発見された千手観音像を安置する堂宇を源頼朝が建立したとし、頼朝と関係があることを記す。

縁起類にみえる製作年代・原所在・源頼朝との関係については真偽を確かめることはできないが、和文縁起によれば少なくとも正保三年には、清水寺に伝来したことがわかる。正保三年以降に清水寺は観音霊場として整備されていくようで、元禄九年に漢文縁起が成立し、同十二年には千手観音霊籤版木（龍峰寺蔵）が造られた[11]。

『相模国分寺志』以来、旧安置場所として相模国分寺・相模国分尼寺や一時国分尼寺となった湧河寺（漢河寺）等の古代寺院が候補に挙げられることが多い。その根拠の一つとして、天平十二年（七四〇）に大宰府でおこった藤原広嗣の乱の征伐祈願として、国ごとに高七尺の観世音菩薩像一軀の造像と観世音経十巻の書写を命じたことが知られる[12]。同書はこの高七尺という像高を根拠として本像をこの観音像に比定する。しかし、仏像の像高は一般的に、頭頂や髪際高を基準とすることから、前述したように本像は髪際で五尺を測る等身像として造られたとみるのが穏当である。そのためここでいう本像の高七尺は、脇手を頭上にかかげた頂上化仏からの法量とみられることから、天平十二年造像の高七尺の観音菩薩像とは合致しない。

また、湧河寺と清水寺の寺名が水に関係する名前であること、さらに『新編相模国風土記稿』に記される元禄まで現在の丘の下に安置され、その丘の下こそ国分尼寺跡であることが大きな根拠となっていた。しかし、前述した江戸時代の縁起類には国分寺や国分尼寺との由緒や関係の記述は見当たらない。国分尼寺跡の近くに伝来していたことは状況としては確かな事実であるが、国分尼寺伝来であるかどうかは確実とはいえず、より慎重な議論が求められるのではないだろうか。国分寺および国分尼寺との関係の有無についてはっきりさせることは困難と言わざるをえず、状況証拠として両寺と関係する可能性について指摘するにとどめておきたい。

三　製作時代について

本像の製作時代については、奈良時代、平安時代、鎌倉時代と様々な見解がある。その最も早く提示された見解は、大正十三年（一九二四）発行の『相模国分寺志』にみえる。すなわち「本尊　千手観世音菩薩　木彫立像高七尺　奈良時代の作　国宝調査委員中川忠順氏認定[13]」という記述である。中川忠順氏によって奈良時代の作例と認められたことにより、翌年には国宝に指定される。昭和九年（一九三四）に増補再版された『相模国分寺志』でも同様に奈良時代とする[14]。一方、昭和三十九年の『関東彫刻の研究』では、水野敬三郎氏が古様な形式は認めつつも鎌倉時代初期に平安時代の古像を模刻したという見解を提示した[15]。以後、昭和五十年の『神奈川県文化財図鑑』彫刻篇をはじめとする本像の解説では、ほぼこの見解を踏襲する[16]。令和二年（二〇二〇）の『相模川流域のみほとけ』で筆者は、奈良時代から平安時代初頭まで遡る可能性を指摘した[17]。そ

の根拠となるのは、本像の古様な形式とカヤの一木造りの構造である。

本像は、水野氏の指摘のように古像を模刻したとする見解が広く認められてきたが、その古様な作風や形式がそのまま製作年代を示す可能性はないだろうか。やや胴長のプロポーション、丸く出た腹、肉付けされた腰から大腿部、両足をやや開いて膝を伸ばして直立する姿は、奈良・唐招提寺の伝衆宝王菩薩立像や伝獅子吼菩薩立像（図11）など唐僧鑑真による唐の木彫像の影響下によって造像された諸像の作風に近い。唐招提寺の木彫像の影響が地方に伝播したと考えられる香川・正花寺の聖観音菩薩立像（図12）の作風にはことに近い。

次に像容の細部を検討したい。本像の着衣形式のうち裙は、折り返し付きのシンプルな形式である。その打ち合わせに注目すれば、本像の裙は正面で右前に打ち合わされる。一方、裙の折り返しの打ち合わせも同じく右前になる。裙の打合せが右前の場合、折り返しのそれは左前になるのが一般的で、実際の布でやってみてもこのような形となる。この特徴的な裙の打ち合わせは、前述した唐招提寺の二軀と正花寺像と同じである。

本像とこの三像の像容をさらに比較するなら、共通する部分として裙の折り返し部の正面左右にみられるU字形の衣文や品字形の衣文がある。本像と伝獅子吼菩薩像の二軀には膝前に翻波式の衣文線が見受けられ、U字状の衣文の中央で一度途切れる衣文線があらわされる。伝獅子吼菩薩像をのぞいて裙の両側面にたくれをあらわさないのも特徴と言えよう。

本像の正面の布の打ち合わせ部には渦文が認められ、背面の衣文は翻波式衣文が顕著にみられる。これらは唐招提寺や正花寺の諸像とやや距離がある形といえ、九世紀の京都・広隆寺不空羂索観音菩薩立像（図13）

図１　千手観音菩薩立像　全体正面
海老名・龍峰寺

図 11　伝獅子吼菩薩立像
奈良・唐招提寺

図 12　聖観音菩薩立像
香川・正花寺

図 14　千手観音菩薩立像
京都・広隆寺

図 13　不空羂索観音菩薩立像
京都・広隆寺

図15　十一面観音菩薩立像
奈良・聖林寺

や同寺千手観音菩薩立像（図14）、滋賀・黒田観音寺伝千手観音菩薩立像等との類似が認められよう。また、両肩に懸かる天衣を背面で一度たるませる形は、同じく九世紀の大阪・道明寺十一面観音菩薩立像にみられる。一方で衣文線の太造りの部分は、八世紀の奈良・聖林寺十一面観音菩薩立像（図15）のような乾漆造りの捻塑的な要素がみられる。

構造の面では、本像は脇手を除いた髻から足元までカヤ材の一材から彫られている。これまで、背刳りがあるという指摘もあったが、前述したように美術院の『報告書』及び『国宝図解』では内刳りについて触れられておらず、実査でも内刳りはないと判断した。カヤ材を使用した一木造りで内刳りを施さない点から、構造でも本像と唐招提寺の二像や正花寺像とも類似点が認められることは重要である。

唐招提寺の木彫像については、代用檀像として造られた可能性が指摘される[18]。本像の作風、像容、構造を検討するとこのような唐招提寺の諸像との共通点があり、正花寺像のように地方に伝播した唐招提寺の木彫像の影響を受けて造られた代用檀像として造られた可能性が指摘できよう。さらに、唐時代の仏像と比較するなら、本像の胴長なプロポーションや品字形の衣文は八世紀の山口神福寺十一面観音菩薩立像のような白檀製の檀像とも似たところがある。

唐招提寺の木彫像の影響を考えるならば、東国と唐招提寺の関係を検討する必要がある。最も重要なのは、鑑真来朝後の天平宝字五年（七六一）に下野国薬師寺に設立された戒壇だろう。鑑真とともに来朝し弟子でもある安如法がそこで一時修行していたことも知られる。同じく鑑真弟子という道忠は、上野国を中心に活動した。平城京から下野薬師寺まで、東山道を通るルートと東海道を通るルートの二通りが考えられ、現在の平塚や茅ヶ崎周辺まで東海道を通り、相模川に沿って北上し、相模国分寺・国分尼寺を通過して武蔵国国府や国分寺・国分尼寺に到達する東山道武蔵路の存在が知られる。具体的なルートを示す史料は残っていないものの、東山道武蔵路を通るルートにも多くの僧が往来したとしても不思議ではない。奈良時代や平安時代には中央の官寺から地方寺院に僧が派遣されることは珍しくなく、景戒撰『日本霊異記』には地方に下った僧について知ることができる。相模国分寺や国分尼寺で活動した具体的な僧についてはほとんどわからないが、九世紀に相模国鮎河（相模川）の浮橋を設置するために大安寺僧忠一が修造に関与していたことが知られる（「太政官符」承和二年〔八三五〕六月二十九日付）[19]。唐招提寺の僧らも相模国の両寺に立ち寄った可能性は十分にあるだろう。

最後に、本稿では否定的にとりあげた鎌倉時代に製作された可能性について検討しておきたい。本像が鎌倉時代に造られたとする大きな根拠は、目に玉眼を嵌入する点である。玉眼は仁平元年（一一五一）の奈良長岳寺阿弥陀如来像を製作年の判明する最古例として平安時代後期にはじまり鎌倉時代に流行した技法である。鎌倉時代の一木造りでかつ玉眼

を嵌入するのは鎌倉地方では鎌倉市寿福寺の地蔵菩薩立像が挙げられるくらいである。ほかに玉眼ではないものの一木造りの構造も大磯町高来神社（高麗権現伝来）の男神像や女神像があるくらいで比較的珍しい。また、玉眼の問題とあわせて、面部の年代についてもはっきりとしないところがある。[20] 今後、鎌倉時代説の大きな根拠となっている玉眼嵌入の頭部をエックス線透過やＣＴスキャンを実施することで、頭部と面部の材の関係や玉眼嵌入の方法が解明できれば、より正確な製作時代・年代の判定をおこなうことができる可能性が残っている。

前述の縁起類にみえる清水寺再興に関わったとされる源頼朝は、京都清水寺とは浅からぬ関係であった。源頼朝は三歳の時、乳母が清水寺に十四日間参籠し霊夢をうけて、二寸の銀製の正観音像を得て、それ以後帰依し念持仏とした。[21] 頼朝はこの観音像を石橋山合戦時に携え、後に自邸の後山に観音堂（持仏堂）を建立し安置した。逝去後ここに葬られ法華堂と号した（寛喜三年〔一二三一〕に法華堂焼失）。このように幼少時から清水観音信仰があった頼朝は、建久元年（一一九〇）に上京した際には、十一月十八日に清水寺に参詣し、僧たちに法華経を読誦させ、多くの布施をおこなった。[22]

このように生涯を通して清水観音信仰が篤かった頼朝と、旧寺名清水寺といい千手観音像を安置する龍峰寺との関係が取りざたされるようになったのだろうか。頼朝は三浦義澄に命じて、相模国の寺社の修理等を行わせていたが、[23] 本像ともなんらかの関係があったとしても不思議ではない。本像の製作時代を奈良時代末から平安時代初頭と考えるなら、諸縁起にみられるように、源頼朝による堂宇建立の中で玉眼に変更された可能性が考えられようし、本像の製作年代を文治二年前後と考えることもできるだろう。

おわりに

本稿では龍峰寺千手観音菩薩立像の作風、細部の形式、構造について検討し、本像の製作時代を八世紀末から九世紀初頭頃との可能性を提示した。本像に関わる史料がわずかであり、東国に伝わる奈良時代から平安時代前期の作例がほとんど残っていないことから、検討材料が少なく推測を重ねた部分も少なくない。ただ、古代東国にも多くの寺院があり、豊かな仏教文化が育まれたことは考古学の研究の進展によって明らかであり、[24] 相模国の彫刻史についても見直しが求められている。[25] 今後さらに本像の製作年代について議論が深まり東国の彫刻史について考えるきっかけとなれば幸いである。

註

（1）奈良国立博物館・ＮＨＫプラネット近畿編『西国三十三所―観音霊場の祈りと美―』図録（奈良国立博物館・名古屋市博物館・ＮＨＫプラネット近畿・ＮＨＫサービスセンター、二〇〇八年七月）。

（2）神奈川県立歴史博物館編『相模川流域のみほとけ』図録（神奈川県立歴史博物館、二〇二〇年十月）。

（3）法量の詳細は左記の通り（単位は㎝）。

総高（頂上化仏まで）一九三・五

頂―顎	三四・三	面長	一六・三
面幅	一五・二	耳張	二一・七
面奥	二〇・〇	胸奥	二七・八
腹奥	二五・九	最大幅（脇手）	一一六・〇
肘張（合掌手）	五一・六	裙裾張	五一・二
足先開（内）	九・三	同（外）	二五・二

実査は、平成三十年（二〇一八）六月十九日に薄井和男・荒井秀規・押方みはるの各氏、令和二年（二〇二〇）十一月二十九日に川瀬由照・村上幸奈の各氏とともに行った。

（4）全文は左記の通り。片仮名は平仮名に変え、適宜常用漢字に改めた。

神奈川県　水堂観世音　国宝修繕竣功報告書

国宝修繕竣功報告書

神奈川県高座郡海老名村字国分

水堂観世音

名称　数量　備考

木造千手観音立像　壱躯　大正拾四年四月指定

構造　本体　大体一木造り　但し頭上化仏は別にとりつけ左右手は各臂及手首にて矧きつけ肩上にて胴に接合せり。両足首も矧付あり。纏衣も別にとりつ（け）あり。面部耳の前にて割り、玉眼を嵌入せり（後補）。

木質　本体は榧。左右手は檜なり

台座　四段の蓮華座。うち三段は切付にして最下の一段は別に葺き重ねあり。漆箔。荷葉座二枚矧き、框座四方矧きつけ円形角入とす。荷葉座以下黒漆塗。

光背　円形に数個の木を矧き合せ、中央に八葉を附す。

修理

損傷せる矧目は取り離しより掃除をなし、麦漆膠等にて接合し、銅鋲、鋳等にて緊結し補足の部分は檜材を用い矧目は木屑を填充し、錆をなし彩色古色仕上げ、或は漆箔仕上げとなせり。修理個所左の如し。

本体　頭上仏、鼻補足。其他損傷を修理し各枘を入れ麦漆にて接合。面部、耳の前にて矧目損傷接合。白毫水晶を新補。両肩矧目縦に損傷接合。両手真手及ひ脇手共附根各臂及ひ手首矧目損傷接合。手指に欠損を補足し、各手枘を入れて堅固に本体に取りつけたり。纏衣折損接合。

持物　残存せるもの損傷を修理し、鉾の枘を新補し、錫杖の欠失せるを補足し、其他経軌によりて新補し古色仕上げとなしてとらしめたり。

台座　打つけ蓮弁は皆葺き直し、荷葉座、横に二枚矧目損傷接合。框座四方矧目損傷接合。台座の損傷を堅め心棒を堅固にし、本体足枘の穴と足枘とを密着する様装置をなし、顛倒の慮なき様装置せり。

光背　八葉の欠損を補足し、円輪の損傷を修理し支柱を新補し台座に立てしめ、黒漆塗古色仕上げとなせり。

新補の部分に補字を刻し修理記銘の銅札は荷葉座裏面へ打付せり。

奉修理木造千手観音立像　一躯

昭和二年十二月依古社寺保存法　水堂観世音

修理竣功畢

水堂観世音　受持僧侶　大西宗博

工事監督　美術院主事　新納忠之介

工事主任　明珍恒男

（5）長岡龍作「千手観音菩薩立像（中尊寺讃衡蔵）」解説（東北大学大学院文学研究科東洋・日本美術史研究室編『仏像の表象機能に関わる総合的調査研究―空間・荘厳・胎内に着目して―』東北大学大学院文学研究科東洋・日本美術史研究室、二〇二〇年三月）、長岡龍作「平泉美術の概要と研究」（浅井和春・長岡龍作編『平泉の文化史3　中尊寺の仏教武術―彫刻・絵画・工芸―』、吉川弘文館、二〇二一年四月）。

（6）全文を左に掲げる。

一、相州相模高倉之郡興徳山清水寺本尊千手観世音縁起写

そもそも此ほんぞんは、大同二年のころ、さいかう京ひがし山きよみづの御すへきにて候。中ごろかまくらを新京とて、悪源太よしひらのさいかう被成候。よしひらはよりとも十三の御とし、いしやまでらにてうちじに候へき、それより平家の世となり候ところによりともよしつね御せいじんにして、おごる平家をたいじ被成候て、ほどなくてんかをおさめ玉ひて、ちゝよしとものぼだいのために、此くわんおんを七どうがらんにこんりうあそばし玉ひて、たゝせ玉ふところは路下よりは山林たり。七堂のほんぞんに、あしゆく、ほうしやう、みだ、しやかをたて、きんしやうには花をしき、いらかをならべしありさま、げにげに仏前のとうりしごくせり。まへには相模川をかゝへ、をくのぜんじにはたきあり。此たきよりはりうとうあがり、いにしへ平家よりたのまれ、あくげんだの御しろ、七どうに火をかけしあまのなき水あり。さればよりとも心におぼしめすやうは、今生は年々せいせいゆめまぼろしのさかいなれば、ていぜんにつかへてはせうせつどもいただき、やさんにわしりてはゑいぐわをもきはめ、花鳥風月に心をよせ、しいかくわんげんにたはむるゝといへども、みなゆめのきやうがいなれ、いづれのしよぶつのぐわんよりも、せんじゆのちかいたのむしきとて、参路被成、ちゝよしとものとんしやうぼだいをいのらせたまひて、御年五十三にして往生のそくわいをとげ玉ふ。よりとも入滅の以後たびたび天下のさはぎあり。其後むゑんじやうとなり候。しめ敬白。

わたくしにいわく

一、大どう二年より、正保三年までは、八百四十三年なり候。鎌倉建長寺天下禅林天源開山大応国師の御末寺、興徳山清水寺と御書拝仕候。然る処に今度観音しゆくぜんのとうらいやらん造立いたし、一銭半銭たりともなげうち玉はゞ、此功徳により、などかは二世安楽の本望寂光の台にいたらんことうたがひはなし。心ざしの元を過去帳におさめおき、毎月に御そくさひのをこなひ仕候。依勧進帳如件

正保三年二月十五日

かまくらけんちようじ内

相州高倉之郡国分村

清水寺

（7）中山毎吉・矢後駒吉『相模国分寺志』（海老名村、一九二四年十二月）。

（8）全文を左に掲げる。

相模相州高座郡国分荘興徳山清水禅寺観世音菩薩縁起

当山千手堂者、蓋源大樹頼朝卿之所営搆也。初延暦庚辰、延鎮上人有感霊瑞、彫二造洛之清水千手大士。竣工之次、尚有余材。因剏之爾後三百余霜、大樹新管領大倭国総追捕。而鎮柳営於山内之時、県吏報告、国分之江瀬有物光影燦爛。凡弥七昏寅。莅視湍上。遭一巨函。宛爾有延暦中之款識。啓之則獲千手大士尊容也。大樹聳聴。躬自迎礼。遂創建梵宇以祠焉。加旃拆鐫。東西南北教主如来各一軀像設之。偉麗莫以尚焉。敷宣瑜伽深密之法要、闡揚尸羅浄戒之儀軌。顓荘厳先考廟之封土云也。既而平氏乱政。朝野陵夷。且属州有巨盗。災及梵宇。赫々金碧靡有了遺。雖然猥燼之間。特大士之尊容儼然無恙。閭里相聴嗟嘆不已。遄図重修焉。正北相去数百畝。卜勝概於斯。未幾何康永癸未之春。我円光大照禅師応聘於龍峰檀信。復為之戮力。家唱戸和。不日告成。于時堂前枯沼。甘泉湧沸。今浅井水是也。由是更教為禅。仍旧貫而日興徳山清水禅寺。直隷於龍峰之支裔。原夫禅師者、弘法大師之後身。而清水道場亦賓師興繕焉。嗚呼異哉。興盧山東林可併案焉。禅師去世三百有九年更泝延暦八百九十有一年也。而況与洛陽霊蹟華夷遼絶。興廃不一。方今梢々蕪没矣茅感召之著未曾聞。歇口碑之所伝。不俟贅也。寺有旧記。両本蠹簡漫漶。莫得而詳之。仍襍此於耆旧之言。叙述綱要者如此。

元禄第三歳次庚午夏五月十七㝵
瑞雲山龍峰禅寺住持比丘碩寿拝識

(9) 該当箇所を左に掲げる。（　）内は割注。
縁起略曰、宝亀九年戊午四月釈延鎮（按ずるに、京都清水寺縁起に、延鎮は初め賢心と称し大和国高市郡八多郷小島寺住持、十禅師天和和尚第七の弟子にて後内供十禅師に補せらると云、）霊夢を得て淀川の辺に至老翁に逢、翁曰、我東行の志あり汝爰に止れ、因て庭樹を指して大悲の像を作らしむ、延喜十九年（京清水寺縁起には、宝亀十一年夏の頃とす、）坂上田村麿偶其庵に来、随喜して財を棄、大悲の二軀を作らしむ、遥の後文治二年丙午秋、相模川の下流に光あり、怪て求るに一巨函を得たり、時に老翁忽然と来て云、此函は往昔僧延鎮が彫刻する所の大悲大士なりと、函を啓けば果て千手の像を得たり、明年丁未、将軍頼朝命じて仮に堂を造て安ず（其一軀は、京清水に安置する所是なり、）文永中に至て堂舎全成、四方の教主新に釈迦像を作て安じ（今の本尊是なり、）縁に因て延鎮僧都を初祖とす、一旦兵燹に罹て荒原となり、千手大士の像のみ存す、文和中に大照禅師郷中に来寓す、是を請て廃跡を興し、改て禅刹とせりと云（按ずるに、此縁起に拠るに、当寺は京清水寺に擬して造立し、本尊は彼寺の観音を模刻せしものなるべし、）

(10) 本史料については、押方みはる氏よりご教示を得た。

(11) 海老名市教育委員会教育部教育総務課編『えびなの観音さま』図録（海老名市教育委員会教育部教育総務課、二〇二〇年十月）。

(12) 『続日本紀』天平十二年（七四〇）九月己亥（十五日）条。（『続日本紀』二、岩波書店、一九九〇年九月、三六六・三六七頁）。

(13) 註7の『相模国分寺志』、一七四頁。

(14) 中山毎吉・矢後駒吉『相模国分寺志（再版）』（海老名村、一九三四年十一月）。

(15) 水野敬三郎「千手観音立像（竜峯寺）」解説（久野健編『関東彫刻の研究』、学生社、一九六四年十月）。

(16) 本像を鎌倉時代とする主な解説類は以下の通り。
「木造千手観音立像（竜峯寺）」解説（神奈川県教育庁社会教育部・文化財保護課編『神奈川県文化財図鑑』彫刻篇、神奈川県教育委員会、一九七五年三月）、神奈川県立博物館編『神奈川の彫刻』図録（神奈川県文化財協会、一九七七年十月）、神奈川県教育委員会編『神奈川県文化財目録』（神奈川県教育委員会、一九八三年三月）、山田泰弘「龍峰寺千手観音立像」解説（『古仏微笑―かながわの仏像―』、朝日新聞社、一九八五年五月）、薄井和男「千手観音立像竜峯寺」解説（久野健編『仏像集成』一、学生社、一九八九年七月）、薄井和男「相模の仏像（湘南・箱根の古仏）」（清水眞澄編『仏像を旅する―東海道線―』、至文堂、一九九〇年十月）、薄井和男「海老名市仏像彫刻悉皆調査の中間報告（一）」（『えびなの歴史―海老名市史研究―』八、一九九六年九月）、薄井和男「仏像」（海老名市編『海老名市史』二資料編中世、海老名市、一九九八年三月）、鈴木喜博「千手観音立像（龍峰寺）」解説（註1の『西国三十三所―観音霊場の祈りと美―』図録）、瀬谷貴之『運慶と鎌倉仏像―霊験仏を巡る旅―』（平凡社、二〇一四年六月）。

(17) 神野祐太「相模川流域の仏像」及び「千手観音菩薩立像（龍峰寺）」解説（註2の『相模川流域のみほとけ』図録）。

(18) 金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之「日本古代における木彫像の樹種と用材観―七・八世紀を中心に―」（『ＭＵＳＥＵＭ』五五五、一九九八年八月）。

(19) 『類聚三代格』十六（『新訂増補国史大系』二五、四九四・四九五頁）。

(20) 註4の報告書では面部を割矧いで、玉眼を新たに嵌入したものと判断する。筆者も同意見であるが、面部の彫り直しの有無については表面観察だけではわからない。

(21) 『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）八月二十四日条、同年十二月二十五日条、文治五年（一一八九）七月十八日条、同年八月八日条。

(22) 『吾妻鏡』建久元年（一一九〇）十一月十八日条。

(23) 神野祐太「養命寺薬師如来像に関する一考察」（『藤沢市文化財調査報告書』五五、二〇二〇年三月）。

(24) 近年の考古学の成果をまとめたものとして、川尻秋生『坂東の成立―飛鳥・奈良時代―』（吉川弘文館、二〇一七年一月）、荒井秀規『覚醒する〈関東〉―平

安時代―』（吉川弘文館、二〇一七年六月）等を参照。

(25) 神野祐太「神奈川県小田原市千代廃寺跡出土の塑像断片について」（肥田路美編『古代寺院の芸術世界』竹林舎、二〇一九年五月）、神野祐太「神奈川・松蔭寺所蔵銅造如来坐像（伝阿弥陀如来像）とその伝来」（『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』四六、二〇一九年十月）。

図版出典

図1～6　神奈川県立歴史博物館保管（井上久美子撮影）

図7～10　筆者撮影

図11　『仏像―一木にこめられた祈り―』図録（読売新聞東京本社、二〇〇六年十月）、図11

図12　浅井和春『天平の彫刻―日本彫刻の古典―』（『日本の美術』四五六、至文堂、二〇〇四年五月）、図81

図13・14　『日本彫刻史基礎資料集成』平安時代重要作品篇二（中央公論美術出版、一九七六年十月）

図15　『国宝聖林寺十一面観音―三輪山信仰のみほとけ―』図録（読売新聞社、二〇二一年六月）、図1

〔付記〕

本稿は二〇一八～二〇二一年度科学研究費若手研究「相模川中流域の仏像彫刻に関する調査研究」（一八K一二二五二、研究代表者：神野祐太）の助成を受けた研究成果の一部です。

〔謝辞〕

本稿をなすにあたり、調査及び画像の掲載につきまして龍峰寺住職大西龍彦氏より多大なるご高配を賜りました。末筆ながら記して深甚の謝意を表します。